

P23
M2N2

以入楚

精
鈴

52

右近不參仍侍從君參事

稻菰袋束亦為侍從贈物事

大將殿渡宇治給事

右近君物語兵部中宮通給始中終事

大將殿石律師來給彼追善法吏之事

大將殿老父於常陸母上事

使贈玳瑁帶大刀事

常陸守來母上取同姓君失給由大發思事

四十九日佛吏律師執行吏

兵部中宮銀思納金送右近君吏

二宮任式部中給吏

大將之念人一西宮之女房宰相文於大將事

明石中宮奉為六条院并紫上波行湯八講事

大將自馬道方奉見一西宮事

女房共翫冰事 大將念申一西宮事

大將謂女二宮不似一西宮給吏

大將參中宮見給給事

大將歸一西宮湯方給吏

一西宮渡中宮湯方給事

一西宮女房大納言君中宮湯物語事

大將上小宰相君事

自宮上字源那君事

自一西宮歌詩文於女二宮給事

被給物語之吏 并河大將給事

兵部宮又近侍從物語給事

侍從參中宮從假事

蜻蛉或給中宮那君近取中宮湯方給吏

兵部中宮心懸給事

大將參中宮給立寄一西宮上辨君中那君戲言事

中將君川平大將戲給事 大將川和琴事

蜻蛉或給中宮那君以西對為湯方事

大將參其方給事 年長女房出逢物語事

い
ととろくもいれとくしきみまじりあも知れにしきふ
れ此にあらわし細にけくといひてきてあつたのふくを
うふれのもれきくといひてふとてり

い
ま名ハ初めと終りよりえりききとてれまうと林とてれと
ま名奇にけりりききとてれも終り終り終り終り終り終り

なふりあつたまじりハ終り終り終り終り終り終り終り
けけりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり

秘
各終り終り終り終り終り終り終り終り終り終り終り
ま名奇にけりりききとてれも終り終り終り終り終り終り

此物語之ま名奇にけりりききとてれも終り終り終り終り
ま名奇にけりりききとてれも終り終り終り終り終り終り

い
はまのま名奇にけりりききとてれも終り終り終り終り
ま名奇にけりりききとてれも終り終り終り終り終り終り

い
はまのま名奇にけりりききとてれも終り終り終り終り
ま名奇にけりりききとてれも終り終り終り終り終り終り

い
はまのま名奇にけりりききとてれも終り終り終り終り
ま名奇にけりりききとてれも終り終り終り終り終り終り

い
はまのま名奇にけりりききとてれも終り終り終り終り
ま名奇にけりりききとてれも終り終り終り終り終り終り

い
はまのま名奇にけりりききとてれも終り終り終り終り
ま名奇にけりりききとてれも終り終り終り終り終り終り

い
はまのま名奇にけりりききとてれも終り終り終り終り
ま名奇にけりりききとてれも終り終り終り終り終り終り

い
はまのま名奇にけりりききとてれも終り終り終り終り
ま名奇にけりりききとてれも終り終り終り終り終り終り

い
はまのま名奇にけりりききとてれも終り終り終り終り
ま名奇にけりりききとてれも終り終り終り終り終り終り

い
はまのま名奇にけりりききとてれも終り終り終り終り
ま名奇にけりりききとてれも終り終り終り終り終り終り

い
はまのま名奇にけりりききとてれも終り終り終り終り
ま名奇にけりりききとてれも終り終り終り終り終り終り

い
はまのま名奇にけりりききとてれも終り終り終り終り
ま名奇にけりりききとてれも終り終り終り終り終り終り

い
はまのま名奇にけりりききとてれも終り終り終り終り
ま名奇にけりりききとてれも終り終り終り終り終り終り

うゝんそいゝ家ゐなく
心
さいゆうこちとそとをいれなく
ゆゑに推量にそよめぬ
そいれなく

みゆき
秘
右を侍従

もとなげろかハ

長
世

ふたつとあけ

婦人等々々々々々

かゝるにのみとあけられハ

叔母の下のふふふふふ

新刊

とほつれんまふまにぬきん
 養母の如く

こゝろをきくはきくはきくはきくはきくは

[illegible]

物へりてせむらん半はくちし
葦のむくへ

草の空をうめんとあひうめをゆるめられ

しむるはつりしちくを世々まむるを

[illegible]

乃從却之
 時雨多

よへのゆくも河原へんそ
いぬけのゆく小湊よりと逢

乃んといふん此世の事なりて是れ救ふの事なり

[illegible][illegible][illegible]

サタ
アミソリ
土田
七次郎
則庵寺と号ス

刀種なるものなり

推ノ字ヲ「まとよむ」

いふくればなる由なり
此
是ハ字毎此物と云く云

ありとハナハナと

ととろくふ
月とあけのつねとたうに花屋にてかえ

いさあせんといふは
いさあせんといふは

いふはあはれいふはあはれ

宮内省に在りて

世にあらはれし
ことごとく
世にあらはれし
ことごとく
えん

あこねをわらうていふれハ 美濃白と云ふ
志すといひしやうとて美濃白をいふなり

志ふもさひーやうそ
 とはな白みんちなり
 沸みともうあそふん
 白みともはのちそく
 今うーとそはなりぬ
 白みつひんちそく

芳とをぬきといふあ
 アケルを
 白ふれらるゝ

いふてゐる
いふのよふにせよ

今もくもとして海にまわくとき海にふたまたまをうけ
 けりてふと文のふたまたまをうけけりてふと文のふたまたまをうけ
 けりてふと文のふたまたまをうけけりてふと文のふたまたまをうけ

きねのいふうへ
とくーやふさふさ
病氣を不意にとり
いふふふふふふふ

時方いふて、さういふ
 大東史出で、権守の白紙に、
 あり

のちのころ
蓮のつぼみ

乃
年
海

中々はふと水々々々
 集こつて集ちつて水々々々

此の世に於ては、又自れを絶

此切なる所を時ぞあそぶべし

予に之をいふに
實 句を其の字に
とてんふふ

をうぬわすていた

而之毛之吟之毛之
海母此男と受けく明立は

あまのけふは雨の白雲地より便所のほろとる流あまのけふ

あまゝ
おきりしはるかにあふれ

きんさまで
時^おあう
そのあてに
にじといふにけ

二ふひやてとさあなるぬと
義
華後坊

此を二よりいへりて
 右を二細とよりて後時

いふ事とあること
美時に作られたこと

いとあさむしくさるゝあぬ
侍は時を以て初し

此のうさぎは
 うさぎのうさぎ

いふに、
むすこつてのなしたのねて

しちくゆほまうにあいまつる海ほのまはまふらり

秘 一日をめてもつて帰るあひし半し

これきいなる人のいふはなやう

常世職（正）はうさういれしきも世々人のいふはなやう

先れとあらう 秘 時方あらうはなやう

むあうさうさうさう 秘 時方あらうはなやう

いつさういふるはなやう 秘 時方あらうはなやう

鬼祓とあらうとハナとさういふはなやう

とハナとさういふはなやう

向來玉為屈原作招魂詞云帝告巫陽曰有人在 我欲補之魂

魄散此巫之 王遂楚詞帝白謂 餘王欲老海南村帝遣巫陽招我

楚天帝教人召とつてさういふはなやう 帝は切利天之王

或抄し字法ちゆと物ゆと海花もあらう相とれとせとる

いしとふとれとさういふはなやう 又海花は玉とる屈原と招魂

乃初とれとさういふはなやう 又海花は玉とる屈原と招魂

乃初とれとさういふはなやう 又海花は玉とる屈原と招魂

乃初とれとさういふはなやう 又海花は玉とる屈原と招魂

乃初とれとさういふはなやう 又海花は玉とる屈原と招魂

乃初とれとさういふはなやう 又海花は玉とる屈原と招魂

乃初とれとさういふはなやう 又海花は玉とる屈原と招魂

乃初とれとさういふはなやう 又海花は玉とる屈原と招魂

乃初とれとさういふはなやう 又海花は玉とる屈原と招魂

乃初とれとさういふはなやう 又海花は玉とる屈原と招魂

乃初とれとさういふはなやう 又海花は玉とる屈原と招魂

乃初とれとさういふはなやう 又海花は玉とる屈原と招魂

乃初とれとさういふはなやう 又海花は玉とる屈原と招魂

乃初とれとさういふはなやう 又海花は玉とる屈原と招魂

乃初とれとさういふはなやう 又海花は玉とる屈原と招魂

乃初とれとさういふはなやう 又海花は玉とる屈原と招魂

乃初とれとさういふはなやう 又海花は玉とる屈原と招魂

乃初とれとさういふはなやう 又海花は玉とる屈原と招魂

乃初とれとさういふはなやう 又海花は玉とる屈原と招魂

眼前は白文をなすやういふわしと時方うへ

きたいときあつていひよ

秘は後うゑ

くはともくしてきいあゝね

是は後うゑの中へいゝあゝね

うゑのひなゝめはなゝいゝあゝね

なまゝいゝあゝねも人々いゝなりあゝね 後うゑのうゑ

うゑのうゑもいゝあゝね 人のうゑもいゝあゝね

うゑのうゑもいゝあゝね 人のうゑもいゝあゝね

うゑのうゑもいゝあゝね 人のうゑもいゝあゝね

うゑのうゑもいゝあゝね 人のうゑもいゝあゝね

うゑのうゑもいゝあゝね 人のうゑもいゝあゝね

うゑのうゑもいゝあゝね 人のうゑもいゝあゝね

うゑのうゑもいゝあゝね 人のうゑもいゝあゝね

うゑのうゑもいゝあゝね 人のうゑもいゝあゝね

うゑのうゑもいゝあゝね 人のうゑもいゝあゝね

うゑのうゑもいゝあゝね 人のうゑもいゝあゝね

うゑのうゑもいゝあゝね 人のうゑもいゝあゝね

うゑのうゑもいゝあゝね 人のうゑもいゝあゝね

うゑのうゑもいゝあゝね 人のうゑもいゝあゝね

うゑのうゑもいゝあゝね 人のうゑもいゝあゝね

うゑのうゑもいゝあゝね 人のうゑもいゝあゝね

半ふと母をぬきぬきとけいしといふなりあり
とふやういふらん 鬼をくくくといふなりあり 世物説

元伊豫物語の鬼くくくといふなりあり 六ヶ河のとも国
河大納言の二条后とくくくといふなりあり 鬼といふ
伊豫物語の鬼くくくといふなりあり 六ヶ河のとも国
小松帝時に和二年八月武徳殿松原有鬼食人則大怪也同亦
六日帝崩御其徴をくくくといふなりあり 鬼といふ例

事記鳥光孝御宇に和三

こつりり物やとくくくといふなりあり 元流文目狐妖獣也

鬼所業也寛平年中脩中国賀陽良藤原は是れて十
三日念れにありし事あり

すーの所のあやにぬきぬきといふなりあり 元女文目狐妖獣也
ともいふといふなりあり 元女文目狐妖獣也

元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也
元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也

秘 元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也

まんぢとくくくといふなりあり 元女文目狐妖獣也

元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也

ようれきといふなりあり 元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也
元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也

りといふなりあり 元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也
元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也

がふけといふなりあり 元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也
元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也

元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也

川の下をけこの下のゆき只硯のふもと下のゆきとくく
元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也

はてはあひより人と 秘 元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也
元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也

いふふといふなりあり 元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也
元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也

いふふといふなりあり 元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也
元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也 元女文目狐妖獣也

秘

いづれもさういふ

母よものよとやうにと

いづれもさういふ

ちとほはなすゝめとてはなすゝめ

いはるゝに

いづれもさういふ

母よ

いづれもさういふ

ちとほはなすゝめ

いづれもさういふ

日本紀に須知をたす

いづれもさういふ

ののろはあり可部

人のいづれもさういふ

み庭をいづれも

いづれもさういふ

いづれもさういふ

いづれもさういふ

いづれもさういふ

いづれもさういふ

家何也或云黃帝已仙上天群臣葬其衣冠 史記

葬衣衾

旧本記第五饒速日尊乘天神御祖詔乘天磐船而天降既

神損去坐天高皇產靈尊以為哀臣即使飄命以命將上於天

上延其神屍骸於天上飲竟玄饒速日尊以夢教於妻御炊屋

姫云汝子如吾所見物即天垂瑞速日尊亦天羽弓羽矢復神衣

帶丰樂三物蓋飲於登美白底以此為暮今者也 畧記

日本記第七時日本武尊他日鳥徒陵出指倭國而屯之群臣

亦曰以同其棺櫬而見之明衣室留衣屍骨無之然遂高翔上

天徒葬衣冠衣衾葬之是木例飲

いづれもさういふ

いづれもさういふ

いづれもさういふ

いづれもさういふ

秘 宇治よりぬきの井内舎人をとすなり

内舎人又ぬきの井内舎人をとすなり

いづれもさういふ

法師のころである

寶八烟此

人々を死にせしむる事あり

いそはるゝ

よてふれ
調ふ
あるに
は
煙を

おとけはよくしらるる

お中元

常陰々々凡々物凡ハ皆来入ナリ

子とあり

又宇治の里人此より宛とて

建いのきりぎりす

入拔拾骨奇方

かゝるといふべきところなる

父母之中に親あり

人々衆の人々ありてある後のもをいふにわづらひ

秘
能_レ爲_レ親あるとあり、いづかんと分才なるは、
あるべし。

大ゆきよりいへる如くせり

秘人のうゝ心

あるとあり

抄本

此系句とを文ゆりなれど

自然は母とく、
之がくも、
遠のく、
いふん、
ち屋、
て、
所、
で、

いふなりやといふて蓮のうづつくとふかふんとなり

いさむね

後此の生の果報を承へり

一にあらざるを類とせしむるをいふ

新
以
之
を
ふ
る
に
先

し
卯
う
め
い
ふ
ふ

まゝに
おはる

有るものをもさすてん

恙
もよのうとちつじんをよそ

如法先喝之

ふくろのふくろにて我々をこそとらぬ

[illegible]

けふもくちのけふもくちのけふもくちのけふもくちの

名を傳へたり

いふなりけりあれはるるをあらはるるなり

入るれゝのなをほいれんふよゝり

叔女三玄人

女にふの初は蓮のふふと花のふふと
他女にもふふと花のふふと

女を文のなりきりて蓮の如くし東宮より出たり

いふに

夢見字後而後

はたのこゝろ

宇治の石井の茶屋に

三、
あ
ま
の
し
ら
く
さ
に

そのまゝの甲子といふ

はみゆきふくみゆき

秘
草
下
り
れ
此
史
乃
は
え

家
あつちよこ
つちをん
かれもとも

ふたりの思ふところ
石山と名物の

うゝは
秘
華豆を地法あり

冠礼
 元服
 婚
 大薨
 薨
 送

礼託もせり
ば、礼人召一斗のちの代法へまゐるに、殊命

なほに法さしくものなり

出
予先^カマ
秘中書人

[illegible][illegible]

之を以てて
 秘
 蓮のふくみけの玉也
 三

せりふをうのまじり
 白文の意をせりふ

物ものの懈怠けんたいをよそや
 ぬ根ねのゆ

なやまをうあうお
なをふのうひをあうにうはる

私女之石山より来る也

文に
 秘
 女二文の
 義

とくしふにきつる

とておぼろしくいへる

[illegible]

義女の名を
 大層に喜ぶ

秘
心

道の妙といふは
 道の妙といふは

をぬはひのゝえゆてゝかゝるまゝ蓮花、我あゝとちり

再
よめる人のそりてやうさふと

仏の志より方便を慈悲をもかくして
秘訣をりして仏の

方保ふてゝゝゝゝゝゝ
私を此致の故よりとのつゝゝゝゝ

そしつゝのゆるさでちよとのひのほろり

送也をもくしてとふくあとしりあひく軟とふく

ははの意也よあめ殿ふれと道心と云ふ之方便ありと

の文ありて二宮
毛 是ハ自文此歌ニ
ありて下ニ

人かへめはやふひのよめと 白文さふくの病のよ

りたりにいひあへばなり

いふれきり 義白れはうらむかき

いふふるふとけり 義白ふくあふすや

とまはれ病あふるさうといふあうと

このよといふく

ちあのみさうく 義白ふくはくあしき

さうく 義白ふくはくあしき

あうく 義白ふくはくあしき

うさあめあふれさうく

文ははくといふ 義白ふくはくあしき

しくあふめさうく 義白ふくはくあしき

私ほあふめさうく 義白ふくはくあしき

白れはうといふ 義白ふくはくあしき

武部さふくといふ 義白ふくはくあしき

さふくといふ 義白ふくはくあしき

花さうく 義白ふくはくあしき

あふめさうく 義白ふくはくあしき

八文のさふれさうく 義白ふくはくあしき

さふめさうく 義白ふくはくあしき

あふめさうく 義白ふくはくあしき

あふめさうく 義白ふくはくあしき

あふめさうく 義白ふくはくあしき

あふめさうく 義白ふくはくあしき

あふめさうく 義白ふくはくあしき

渡痕不愛君思断 武部千行更万

あふめさうく 義白ふくはくあしき

あふめさうく 義白ふくはくあしき

あふめさうく 義白ふくはくあしき

あふめさうく 義白ふくはくあしき

さくらばの

い
もより差のちひなみり

私をいふやうなものをいふやうな
私をいふやうなものをいふやうな

養
分の

秘白はふ月此蓋紙の中にあつてなをのりまゝと
 けをとりこゝに書きまゐるを　い　まゝとり白文はひまふ
 義　是白文に白紙の紙厚あつたりこゝにそゝりぬる
 こゝろくもあつたを　秘白文は
 義　白文に白紙の紙厚あつたりこのさゝりぬる白文は
 ぬる大いあつたにぬるをともあつ

空より多味をとりて食ふ

可增瘡。半夜敬寫入。

薄媚

狂雞
二更唱曉
仙遊署

今更之

恙のふりてはあはれとてとて推量

[illegible]

物事は新しきものなり

萬葉集の巻のしるし

こゆきくろのあなはかりたをうひくまをふてはきん

自れ親をほめゆと少くもふかよりとぞうんとぞかほく
 まゐらうらあそびに　わさりとこもてはよりまゐらう

わさりとてふらきふら

そむくやゆらとぞ

叔
川方アリ海舟
はるかにる
海舟の人
をさうして

死
白文はよき本程ふくむと云ふは名方と海舟のふくむ

りてふと音

是ハルヲモトメテ

何と云ふに其の意は

ちくよの物ころ
 世に物なり長前ハ水王と此と此

いふてゐるや
ふたのふたを

志事乃公之公也

著者字志々々七二終

寄蓮子句亦中

と中へ此へ入るてゆり

歩道の中を歩くと

位
高
く
あ
る
を
も
と
と
り
て
人
を
四
人
と
し
て
と
り
て

大寺
のり
し
て
る

秘
在
日
有
力
の
魚
を
か
き
と
り
て
一
人
に
与
ふ

五ノ六ノ七ノ八ノ九ノ十

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

白鳥のう

御宿をよめなきて

イリクニシテハ
ハシラシキ

秘
しうやほのゑといひのう

中
改
て
い
け
り
の
う

ちよの

大石のゆりくはみちをのぞく

常陸のあそび

女官とけり時かと

はあはあ

まゝにちやうどいふやうになつて

秘
白
く
耳
と
い
ふ

笑はぬのさへ人をめづるに
 白帯ての類

策
秘
字
海
北
比
本
意
奇
北

あつてふかたは、これとせうとせうとみえ

寄信此心よりきねも中産命のさふめくしくぞい

先づぬ人あらうとみえりて

三つは、
一、
二、
三、

上
中
下
及
之
多
少
と
又
知
る
事
は
下
に
在
り
融
解
の
方
に
在
り

いづかへなるべし 蓮のそはとにあげくも匂へんかな

りし志をいんふのふきぬくをわたり

て歌ぬうとくめてちうとんぐ

白井湯年にある。

一、

秘
白牡丹

私白の如え^極なりて是れなりかみくありらいま

養氣功之要

のうなれどもよ

秘
芝の幻なり句

五、清溪寺址海内寺

子
うゝあをうら
し
し
し

新之君は下葉あり 幾月

秘
中
之
書
入
彙
目

尋問

三

[illegible]

いふはあつた

是乃此子，可已哉。

ふんふふにのちとせ

弁

はなの宮をなれど云

何と云ふ宿世と云ふ人 善人

苗代の沸、門所、白宮と所、新をけるを、之

秘はあそこのせとくち

久とほき

海島記

[illegible]

秘

人かくまにあふまへにけり

不如不遇傾城色

白氏文集

遊仙窟

仁王經玄初一念識異木石

伊勢物語。しゝ男ありたり女とぞく

子月旦ふろ石本にそわぬ心とそわぬ

人非木石皆有情、れはまゝくものゝとまては、他も亦詩なり

漢武帝のなげさみといふのは、
たゞしといふ事

まぬふゑはあづなぐにうあぢやうれと

つてゐるにせう
秘 幕送の御金ふとそり金

策少交

[illegible]

花
ちりくろるはゆいのかき後れとて

とてさるるふに人なり

之方妙なるを述はしむ幕れあめとせふやと候る

秘母とて受給されんあれは世俗のものとていふも
なりこのりもあらんとて 長篇

三十ヶ目も穢はるるも いふ あハをばく
いふといふてあらんとて いふ ちとせとて

私をばくといふてとて いふ ちとせとていふて
戸迄へのものなり

月あらしとてとてとてとて 秘 月あらしとてとて

寅(寅)とてとてとてとて 秘 卯月十日にさくられあらんとて

卯月十日にさくられあらんとて 秘 卯月十日にさくられあらんとて

卯月十日にさくられあらんとて 秘 卯月十日にさくられあらんとて

卯月十日にさくられあらんとて 秘 卯月十日にさくられあらんとて

卯月十日にさくられあらんとて 秘 卯月十日にさくられあらんとて

卯月十日にさくられあらんとて 秘 卯月十日にさくられあらんとて

卯月十日にさくられあらんとて 秘 卯月十日にさくられあらんとて

卯月十日にさくられあらんとて 秘 卯月十日にさくられあらんとて

卯月十日にさくられあらんとて 秘 卯月十日にさくられあらんとて

卯月十日にさくられあらんとて 秘 卯月十日にさくられあらんとて

卯月十日にさくられあらんとて 秘 卯月十日にさくられあらんとて

卯月十日にさくられあらんとて 秘 卯月十日にさくられあらんとて

卯月十日にさくられあらんとて 秘 卯月十日にさくられあらんとて

卯月十日にさくられあらんとて 秘 卯月十日にさくられあらんとて

私大門に或る女道定むと云様をたふす時方世三人あて
右をしらうつらん 義字伝(名道)まはなりあて

母もはらうこの水れき 義(二)さやのぬ川のきまきと

なふもつてくく京へうりあふく

り(三)さきハ 秘白れき

あやうふくにきりしもの井くさういしとてん

義ほれとせぬあききりすうそれあしなり

こころのあやういしききり 秘あききりぬのぬの白

のききりあきりしきりいふくきりぬのききりあきり

ふまきりきりきりきりきりきりきりきり

時方きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

てふきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

くはきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

きりきりきり

い(四)きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

物(五)きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

たまきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

物のきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

ぬきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

ぬきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

きりきりきりきりきりきりきりきりきりきり

こゝありまゝといふ 右より左は 必はみのおめさる腹もさる

よりして何と成つてこゝにせし 必はみのおめさる腹もさる 秘中といふとあると

右をさるPとん腹の如といふよりして左は 必はみのおめさる腹もさる 秘中といふとあると

沸いて何と成つてこゝにせし 必はみのおめさる腹もさる 秘中といふとあると

よりして何と成つてこゝにせし 必はみのおめさる腹もさる 秘中といふとあると

右をさるPとん腹の如といふよりして左は 必はみのおめさる腹もさる 秘中といふとあると

沸いて何と成つてこゝにせし 必はみのおめさる腹もさる 秘中といふとあると

よりして何と成つてこゝにせし 必はみのおめさる腹もさる 秘中といふとあると

右をさるPとん腹の如といふよりして左は 必はみのおめさる腹もさる 秘中といふとあると

沸いて何と成つてこゝにせし 必はみのおめさる腹もさる 秘中といふとあると

よりして何と成つてこゝにせし 必はみのおめさる腹もさる 秘中といふとあると

右をさるPとん腹の如といふよりして左は 必はみのおめさる腹もさる 秘中といふとあると

沸いて何と成つてこゝにせし 必はみのおめさる腹もさる 秘中といふとあると

よりして何と成つてこゝにせし 必はみのおめさる腹もさる 秘中といふとあると

右をさるPとん腹の如といふよりして左は 必はみのおめさる腹もさる 秘中といふとあると

小句のあはれなり

清みなりしれいまりに

并げのふねと侍候

みなりしれいまりに

あはれなりしれいまりに

あはれなりしれいまりに

あはれなりしれいまりに

あはれなりしれいまりに

あはれなりしれいまりに

あはれなりしれいまりに

あはれなりしれいまりに

あはれなりしれいまりに

あはれなりしれいまりに

あはれなりしれいまりに

あはれなりしれいまりに

あはれなりしれいまりに

あはれなりしれいまりに

佛とちりなり

あはれなりしれいまりに

あはれなりしれいまりに

あはれなりしれいまりに

あはれなりしれいまりに

あはれなりしれいまりに

あはれなりしれいまりに

あはれなりしれいまりに

あはれなりしれいまりに

あはれなりしれいまりに

あはれなりしれいまりに

あはれなりしれいまりに

あはれなりしれいまりに

あはれなりしれいまりに

あはれなりしれいまりに

あはれなりしれいまりに

わが心もさうせし 甚し細く川うらうらあ及く
きせしめらる海に 秘めねばはふりあふなり

私見信しめ外にいふん
美徳と 秘めたまふにふん

よりたにけりけりしや さらけ家とあめはるりし
舞臺の心をとらふてや甚とをほしめあめあめ
甚の念はなるをほめあめしりしあめあめあめ
いふはくあふいふし 秘めくの知

また人の心をいふなれしなり
又のあめ 美白れあめあめ

人の心をいふし 白まじくのをいふし
つひあいにあつてあけさし 美母の心をいふし
つひあいにあつてあけさし 美母の心をいふし
あつたにけりしあつたに 右をいふ
いふにあつたにけりし 左をいふ
くはる様

よのつらさうし 秘めくの知

は文のつらさうし 中二条院はあめあめ
いふにけりしあめあめ 白の二条院はあめあめ
あめあめあめあめ 秘めくの知

あめあめあめあめ 秘めくの知
あめあめあめあめ 秘めくの知

あめあめあめあめ 秘めくの知
あめあめあめあめ 秘めくの知

あめあめあめあめ 秘めくの知
あめあめあめあめ 秘めくの知

秘 新
心山にありて西の山を望みしに
都なりともいふに今なるものいふより
たゞるなりとて

はまのなをたえきまゝく
宇依の星のなをり

土曜日の夕方に

人の子そ先多し

あやうしく
けうをいふては

字々といふのてり身とせりり

うたは、あつたひまふりて
夢送るくくち

そいつふはもとやうにとりてそひき

さうらの人の子をてハ
母の母先よはむをうけしをそと

昔のふとくは、
秘句のふとくを

一
 田
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

女客の取あらしめ

きうりやと母のふと差の推量

きういふふはまけき
現在此所をぬる

なれども人々にはきこひのきこふ事あり

御々海のちちとやして
車ノ榴なり

これより又うさなをあらそひしをより本の法とあらうん

[illegible]

いふとちのふりもあしと

今ハ
 前
 型の律師
 也

秘
今有客のてり建ハ
義殺生乃准換

如溺水之人急須偏救岸上之人何用濟為

あまのうへ
海に生かす

何事ぞ
 毎尾は蓋のどろき

いふ所とのうへ

世といふものゝもとにまゐつてふりそむのあまのさぬ

養
疾之方也。謂之爲海者。凡物出焉。

乃々々々々々
乃々々々々々

いづれそのつぎなうゝかぬ

かののたふと
 ありあはしあしはくろく
 せき

ふせはふせ貞久八云抑抄に源氏といふなり河内がふせ

むかしに遊ばしうれあつたがた

新しき見せしをかく万葉う石川乃見よまうとて

秘河海流いこうせは川を具なりとて

の母をいふよりこころいふ

まいの家よりえいん

ふれといふれいん

ゆいりいれいん

よめいん

あつた人のこころ

大將より神は

あつた人のこころ

あつた人のこころ

あつた人のこころ

あつた人のこころ

あつた人のこころ

あつた人のこころ

あつた人のこころ

あつた人のこころ

あつた人のこころ

あつた人のこころ

あつた人のこころ

あつた人のこころ

あつた人のこころ

あつた人のこころ

あつた人のこころ

あつた人のこころ

あつた人のこころ

あつた人のこころ

あつた人のこころ

あつた人のこころ

かしげがさいとて紙

秘

衣入るてとあり

里れちりもいゝわう

是も里れ名のうとて

ふゆふりて

ぬれふもこののやゆもな

あはてさうては時ゆふににやとていふふゆもつけくも

義 芝の世は作ゆふもていふはゆふのうははとて

かうもなむ

秘 海ぬめあててちぬもな

とあふさふゆ常

常帯とあふもなとて

一やちふふふふふてさうふふふふふふふ

うたふふの常

班犀帯

秘 班犀也

花さふふり

班犀帯で位五位之人常ニ用ふて服者ハ鳥犀帯讀圖ハ

班犀とふふ

いしきふあふふふふ

秘 品いふふの度りおとて

義 美乃ゆふ

秘 けふのふふふふふふ

こつちひゆふふふふ

はふのぬのゆふふふ

ふにゆふふ

こふのゆふふふふふふふふ

さうゆふていふふふふふふふふふふふふふ

ゆふゆふ

秘 家れふふふふ

義 母も奴とゆふのふふ

ふふにふれふふふふふふ

義 常帯ふふふ

ふのあふふふふふふふふふふふふふ

秘 美乃ゆふふふふふふふふふふふふ

秘 常帯のふふふふふふふふふふふふふ

かゆふふふふふふのふのふふ

秘 海ぬめあふふふふふふふふふふふ

義 常帯のふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふ

秘 俗タウト日本紀

うふふのふふ

義 常帯のふふふふふふふふふふ

ふふふふふふ

秘 常帯のふふ

義 常帯のふふふふふふふふふふ

母のふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふ

母の母のふれかたる常陸うめらあつたき
やりしもつてなるへき
義常陸うめらけあつた

うめははふれあふふれ
秘は母のふれ
めいりふれあふ

てもつたしふ時常陸はかへつて母れふてふ
ふれあふふれ
義常陸うめらけあつた

秘は常陸うめらけあつた
秘は常陸うめらけあつた

秘は常陸うめらけあつた

いふつたふれあふふれ
義常陸うめらけあつた

ふれあふふれあふふれ
義常陸うめらけあつた

ふれあふふれあふふれ
義常陸うめらけあつた

ふれあふふれあふふれ
義常陸うめらけあつた

ふれあふふれあふふれ
義常陸うめらけあつた

秘 母のふれあふふれ
ふれあふふれあふふれ
義常陸うめらけあつた

ふれあふふれあふふれ
義常陸うめらけあつた

ふれあふふれあふふれ
義常陸うめらけあつた

ふれあふふれあふふれ
義常陸うめらけあつた

ふれあふふれあふふれ
義常陸うめらけあつた

ふれあふふれあふふれ
義常陸うめらけあつた

ふれあふふれあふふれ
義常陸うめらけあつた

三代実録云貞観十の七月
未延六十僧於紫雲殿
誦經

為く又中院之佛堂
六十僧法
誦經

七僧も六十僧の中にいれさす
秘常八大般若ヲ讀誦之時六十僧ニ此法をもつての類々
秘花鳥のかね

くくくくくくくく 来居て

おろりおろりおろり 白うらふたさうり思ふくくくく

右と左のくくくくくくくくくくくくくくくくくく

あふくくくくくくくくくくくくくくくくくく

ひくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

りくくくくくくくくくくくくくくくくくく

いりくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

はくくくくくくくくくくくくくくくくくく

きくくくくくくくくくくくくくくくくくく

まのくくくくくくくくくくくくくくくくくく

七僧くくくくくくくくくくくくくくくくくく

四十九月ふりく講師讀師咒願三礼明散花堂達是ヲ七僧ト云

まよりくくくくくくくくくくくくくくくくくく

あみくくくくくくくくくくくくくくくくくく

あふくくくくくくくくくくくくくくくくくく

あふくくくくくくくくくくくくくくくくくく

あふくくくくくくくくくくくくくくくくくく

あふくくくくくくくくくくくくくくくくくく

あふくくくくくくくくくくくくくくくくくく

あふくくくくくくくくくくくくくくくくくく

あふくくくくくくくくくくくくくくくくくく

あふくくくくくくくくくくくくくくくくくく

あふくくくくくくくくくくくくくくくくくく

あふくくくくくくくくくくくくくくくくくく

まゝし束のうゝぬかき人の性と人をまけり
こゝろいふ文のさきとゆゑのや
秘 式部文幕一紙あり

の怪談とあると六条院よりとるものなり
寄 明乙申^文の書とらむとてそのせり
筆 二宮なり式部よりぬきよけり

秘 白文の由りて式部の文の關り入る

寄 明乙申^文の二文のゆゑとるものなり
秘 白文
秘 白文
秘 白文

一紙の文のゆゑ 白文一紙の由りぬ
よけ人のうゝとてえさるやあるなり

一紙のうゝとてえさるやあるなり
大將のうゝとしていひぬ

小宰相のうゝといふ人の
寄 一紙の由りぬ
其の由りぬといふ小宰相のうゝといふ人なり
あり

は宮より一紙といひていふ
秘 白文 義日

花 白文といふ人といふなり
其の由りぬといふ人といふなり
白文といふ人といふなり
秘 白文

いふなりぬ
秘 白文
白文の小宰相といふなり
白文といふ人といふなり

秘 小宰相といふ白文といふなり
小宰相といふ白文といふなり
私 白文といふ人といふなり

は人といふ人といふなり
秘 白文
白文といふ人といふなり

白文といふ人といふなり
白文といふ人といふなり
白文といふ人といふなり

小宰相 白文といふ人といふなり
白文といふ人といふなり
白文といふ人といふなり

よの裏をくはふれぬも
料ありてふれぬも
今よりいへるなり

昇
後撰十九
萬松五葉に
海あり

いふをせよの勅出の御り

秘
公はみにかきとふくしやあつた物より次めをかきとる

正徹室町よりそけいの虎と海虎の対

奇あさうとちふ
慈恵院の位小後撰十九ふ

萬世に傳へし
ふたつは心を
くみあひて

とらふちるるにきくを根月をのりやゆきとて

い
は
あ
ま
と
と
あ
ね
さ
い
な
け
う
あ
と
と
そ
一
宮
の
小
宰
机
を
張

養にふくむて又古の如く
 犯す劫

物あはれなるはれ
ふれなるはれ

つゝやうに世を忍ぶる必要たるのことは、
必すの事なるを、
しるすべし。

世間の世よりまじく人の心へ入るゝ

小室同所小室と分いなるいふとて人の思ふなり歎めやと

小室相馬のふくし
義経のふくしと云ふと心ふくれとせられんをちけるゆへ

天文二年十月
及此少佐私商之

小宰相と云ふは

私より世より大なるものをかりてつくれば

人の心をくは歎ぬと知てよく批評するものなり

小宰相のそとへの刻と

よふにひきあふとて

いとふくまにめくしまた
新芝の祥々小宰相の祥々

いふ流る所可なり
秘蔵の地あるを人知ると

今少もあじはる人々
これ等のうきこ

婦人ひとも紙よりきくはるの志ありぬと

此人も江戸北山家のおもて秘葬に有代安る

せうりふりふりふりふり
小宰相ふりふりふり

人より人か少と
花より人か少と

私に成る所なり

なまこを煮る

五
 一
 二
 三
 四
 五
 六
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

とてしらぬ

秘
宮つゝ人はおとろへしとて
弄 舟よりさく人のなるといふ
つひはおとろへしとてさうゆ
いさゝかのゆゑは小宰相とてひ
とて中人とてさうゆゑ人あると
いふ
人志あるとてさうゆゑ人あると
いふ
とてさうゆゑ人あると
いふ
小宰相とてさうゆゑ人あると
いふ

私共今よりあれはなほあるや
くらむれものさうにほへるや
中宮の御八講へ

弄 秘
 羽石申宮のうりゆせりて六条比やとのゆき
 夏はゆきけ物より文のゆきとよりていふはひや
 うむいあはこころふ志より海とみせり
 私に秘注此下はみへりてふ書あり

明之中宮の御氏紫上なるものなるをひまを
 五巻の日記とハ 秘 薪の仍道へ中日を提婆岳之日へ
 又日とあるをみるに 又日ハ延和之日へ朝庄とて
 御しく御世末よりものしくあつたむじるとして

秘五、日十、在之、沛八、講也。
義、
結乳之日ハ、鈴、在、く、り、也。
沛、堂、の、莊、嚴、と、あ、る、を、ひ、く、

小のひさしとゆゑとてあら
 東の隅にあらるる西よりよりなる
 寝るの小面

西のうへにのみ水^宮をうへたり
 舟 舟のうへに六条流の内西の夜を八海をうへたり
 物 物をうへて 舟のうへに六条流の内西の夜を八海をうへたり
 舟 舟のうへに六条流の内西の夜を八海をうへたり

大將のちとくさうへん
秘八講小東帯く赤衣ありあつた先より
ふりやうけは儀の中に八講の庄儀なり
了るのこゝに義寝交よりあはれしくおゆるす

ふれりてぬきと
後居のるゝ退きし
くろ宰相と
小宰相と
あふ宰相れとをいふはくみといふ

さる人のわるけいひ　よつめの女房なるのわる
ふらりれいけい

いとりめ　あつてい　まふふのまのりふとくみめ
ひとりめ　あつてい　まふふのまのりふとくみめ

花　延喜主氷司式日凡供御氷者起四月一日盡九月世日其四
九月日別一駄　以八頭為駄唯二石二年　五八月二駄四頭六七月

三駄又日凡供中宮氷者五八月日別四頭六七月六頭
今案氷物者六七月のりつこつを加増してりてつるにり

乞となり今物治より中まふる氷なりと下
仁徳天皇六十二年甲戌五月此歲額由大中慶皇子獵于園

鶏時皇子自山上望之膳野中有物其形如廬仍追使者令視
還來之曰宸也因喚問鶏稻置大室同之曰有其野中者何宸

矣啓之曰氷室也皇子曰其蔵如何亦素用至日堀土大餘以
草蓋其上敷敷茅菰取水以置其經夏月不泮其用即當熱月

漬氷酒以用也皇子則將來其駄于御所天皇歡之自是以後
每當冬季心蔵氷至十春分散氷也

かしめもきこもきこ

暑さ日あれハ少を礼の祥も

あふてハんまりなり

あふてハんまりなり　あふてハんまりなり　あふてハんまりなり

あふてハんまりなり　あふてハんまりなり　あふてハんまりなり

あふてハんまりなり　あふてハんまりなり　あふてハんまりなり

あふてハんまりなり　あふてハんまりなり　あふてハんまりなり

あふてハんまりなり　あふてハんまりなり　あふてハんまりなり

あふてハんまりなり　あふてハんまりなり　あふてハんまりなり

あふてハんまりなり　あふてハんまりなり　あふてハんまりなり

あふてハんまりなり　あふてハんまりなり　あふてハんまりなり

あふてハんまりなり　あふてハんまりなり　あふてハんまりなり

あふてハんまりなり　あふてハんまりなり　あふてハんまりなり

あふてハんまりなり　あふてハんまりなり　あふてハんまりなり

あふてハんまりなり　あふてハんまりなり　あふてハんまりなり

あふてハんまりなり　あふてハんまりなり　あふてハんまりなり

あふてハんまりなり　あふてハんまりなり　あふてハんまりなり

あふてハんまりなり　あふてハんまりなり　あふてハんまりなり

あふてハんまりなり　あふてハんまりなり　あふてハんまりなり

秘

秘
小宰相

美いものあるところへ行く

しやうらとにじのよちゑて
次の人のふ

二六
叔
とある人
松別の人

わがき
紙よみかへ

とよりゝかてしあせられ
一宮七紙つゝとあせられ

いづれを
一ふのちを

ちつといた
おのゝちのちのち

ちとらいん
一ふあらいとせしき

なりてんむてうしうとちひさう

まゝの屋敷
かゝる物
は
さ
し
て
い
ふ
と

花よりうさぎ

そのとくあつとふる

うみのもみちをめぐりて海をくぐりて

三ノ口

下らゝ女の月を
おぼへぬなり

[illegible]

土の砂紙へまゝにと
 著る

ちとめらふて
ふたの月を

出入五
筆

たのちゑのまゝらち
初夕、芳のゆきまゝとく

[illegible]

ともちよにあらそ

ふとくふもすゝなりと
も 芝のふとくふもすゝなりと

ふう草と標と正にちれふやぬうらてふてふ

けりぬやう
秘
しちる音をうたへ

之困して令く之ふなり
 之いふてなり

此紙女の知つゝいと書く小宰相のいひつゝ調子にともなく

くはへふふの市初ふ下らせの志のふりあふとこ

此はくちしるゝの土なり

予
此の書は
て
り
る
を
ん
さ
く

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

小宰相優ゆるもみうらふとにやこまのやうに
それより次とて又下らぬ女房のさうにてもあま
さういふやうに様重にさへあり

いふ人さやうにやうになつてしむと
秘 二宮より二宮よりとてさへあり

一宮より二宮よりとてさへあり 大工のさうにやうに

浮舟のさうに小宰相よりとて二宮よりとてさへあり
年がたてさうにやうに 一宮よりとてさへあり

中よりさうにやうにさへあり 大工のさうにやうに

さうにやうにさへあり 二宮のさうにやうに
秘 二宮より

二宮よりさうにやうにさへあり 一宮のさうにやうに

二宮よりさうにやうにさへあり 一宮のさうにやうに

二宮よりさうにやうにさへあり 一宮のさうにやうに

あつてさうにやうにさへあり

あつてさうにやうにさへあり 二宮より
秘 二宮より

大工のさうにやうにさへあり 二宮のさうにやうに

一宮のさうにやうにさへあり 二宮のさうにやうに

さうにやうにさへあり 二宮のさうにやうに

二宮のさうにやうにさへあり 一宮のさうにやうに

さうにやうにさへあり 二宮のさうにやうに

さうにやうにさへあり 二宮のさうにやうに

さうにやうにさへあり 二宮のさうにやうに

さうにやうにさへあり 二宮のさうにやうに

さうにやうにさへあり 二宮のさうにやうに

さうにやうにさへあり 二宮のさうにやうに

さうにやうにさへあり 二宮のさうにやうに

さうにやうにさへあり 二宮のさうにやうに

第一所宮の市井家来のしづくに女二宮よりせしむるは
 松一所宮の徳もあつるよりあはれなるをえり
 清くの中をさすをえり
 ありとありとありとあり

ひつてくまをふ

是と女一文と似せし

皆女一交乃如とりてあらひまひその如く見

とそひつなりき

小宰相の少と

一ふ交りなりしゆをさひせと蕙のまのいかりを
かのもちりたり

蕉のゆゑと云ひてゐるの

上
し
ろ
る

あ
う

な
り
小
ゆ
へ

也

繪ふててりてりてりてりてりてり

秘
孝
人
の
心

漢軍を更人のものとする

後集
不書之入るありの
よりたはぬ兄方少し似せ

29

此乃古今中外之至理也

一、その内、そのうち

ふとちう

一品より近きもの

[illegible]

一、子文の所、みくをゆゝくといふ、美の如し

にやうけのふひふ

必女
二宮の正妃と上内裏のもの

私の内裏へハコトナリ



多々少々略するを以て

義
ふたつと云ふ二家の意

又具一子ありて名を元とす

ちよのちよ

必
あゝの申定



いゝゝゝゝゝゝ

必
女二文の刻
義

けとちりふちりて

美芝の如

22

五海一舟

女二交う早止して音アヤミぬと

ちるよあり

美の心中文あり

白文也

らるしふゆゑそめうもものさへ

西文大正六月以丁子澤惟と爲し終るに記見たり

丁子澤のきく惟復芝の河津と君より河津の表

[illegible]

21

女乃其ありの如くあらしむとて

白文と女一品の文ふくむとて

あまや境もろく 白のおういふく 後

はりてあつてゐるやうに 白文と女一品の文ふくむとて

白文と女一品の文ふくむとて 白文のおういふく

白文と女一品の文ふくむとて 白文のおういふく

白文と女一品の文ふくむとて 白文のおういふく

白文と女一品の文ふくむとて 白文のおういふく

白文と女一品の文ふくむとて 白文のおういふく

白文と女一品の文ふくむとて 白文のおういふく

白文と女一品の文ふくむとて 白文のおういふく

白文と女一品の文ふくむとて 白文のおういふく

白文と女一品の文ふくむとて 白文のおういふく

白文と女一品の文ふくむとて 白文のおういふく

白文と女一品の文ふくむとて 白文のおういふく

白文と女一品の文ふくむとて 白文のおういふく

白文と女一品の文ふくむとて 白文のおういふく

白文と女一品の文ふくむとて 白文のおういふく

白文と女一品の文ふくむとて 白文のおういふく

白文と女一品の文ふくむとて 白文のおういふく

白文と女一品の文ふくむとて 白文のおういふく

白文と女一品の文ふくむとて 白文のおういふく

白文と女一品の文ふくむとて 白文のおういふく

白文と女一品の文ふくむとて 白文のおういふく

白文と女一品の文ふくむとて 白文のおういふく

白文と女一品の文ふくむとて 白文のおういふく

白文と女一品の文ふくむとて 白文のおういふく

白文と女一品の文ふくむとて 白文のおういふく

白文と女一品の文ふくむとて 白文のおういふく

白文と女一品の文ふくむとて 白文のおういふく

必
おとろし

志をなすにふたしうありてふ

奇
 やうに
 せぬ
 とも
 美の
 宝
 れは
 れ

しゆいりよりそくしんあふまふとくちやふ

私董明之仲文兄弟之

いふことあるといふ本とて七巻の

策前よりいふ通り
取違ひは是れを以て
爲るゝと爲るゝ

ふくしとふくし

此はさしとてぬきし
記すべしハ

一、文と書

なりけりふくむるの下心をくはれと明中よりかきぬ

いと秋の夕の人はあふ

小宰相

わじりてあきふく

八海

帝
八海の海女一文ありて

少はともなふと

女一 交れけりあり

た乃土をれをくを

夕方のゆきりく

大いふるなりあ

必
芝の如く

はたそのまじり入りのくさくさは

毒女一宮の物うゝも蓮ふゝもふゝも外にをを

母の爲め内裏より今日名仕の公と云ふ

内と見るといふは、その中にも差がある。一歩を

物うきもなまへにあらはれぬものぞ

五つふんとくをへてりやうと

齊
之

美のあゆみ
うぬし
こと夕方
あふれ
そふ
乙と

六乃三多九之紙

乙未年九月

必
夕霧のあり

いまだうらなうにせぬよしそ

必
やうな
の頃

とくちのあはれ

一、子の女房を去るなり

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十

水戸の地

中々の湯

一 小文申宏の所よりせむるなり

ちみちのそめよとあつていふ

編
古文ハ中ニ

必^ハク^ニ此^ノ中^ニ宮^ノの女^ヲ又^ハ子^ト視^ス

沸しものにありてある大納言君

大納言君

小宰相の玉子物のぬいし

大納言と云ふと云ふと云ふ

また人さへふ人さへふと云ふ

明石申宮の刻

私より先人さへふと云ふ

おちとられし人さへふと云ふ

おちのふと云ふ

なる人さへふと云ふと云ふと云ふ

小宰相おちとられし人さへふと云ふ

明石申宮と小宰相

と云ふ人さへふと云ふと云ふ

けふはこれと云ふと云ふと云ふと云ふ

申文と云ふと云ふと云ふと云ふ

私より先人さへふと云ふと云ふと云ふ

人さへふと云ふと云ふと云ふ

大納言と云ふと云ふ

道の小宰相おちとられし人さへふと云ふ

さへふと云ふと云ふと云ふと云ふ

さへふと云ふと云ふと云ふと云ふ

文と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

白文と云ふと云ふと云ふと云ふ

なりと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

秘 小宰相白宮へつと云ふと云ふと云ふ

白文と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

またつと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

此宮へ申宮と云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

白文のお文と小宰相のお文

おちとられし人さへふと云ふと云ふ

いとおと云ふと云ふと云ふと云ふ

大納言と云ふと云ふと云ふと云ふ

またつと云ふと云ふと云ふと云ふ

白文のお文と小宰相のお文

またつと云ふと云ふと云ふと云ふ

白文と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふ

申文と云ふと云ふと云ふと云ふ

常陸乃と云ふと云ふと云ふと云ふ

常陸乃と云ふと云ふと云ふと云ふ

白文のお文と小宰相のお文

またつと云ふと云ふと云ふと云ふ

白文と云ふと云ふと云ふと云ふ

はるなりと云ふと云ふと云ふと云ふ

白文と云ふと云ふと云ふと云ふ

必明石中寔

并

何—申文の由

此の類の題名

たふしと蓮のうへをなら

[illegible]

秘
大納玄羽

一、予は天下の公を宰相に

小宰相よりとて常陸守より下臺へ字依

下臺公

松此篆の形を以て奇

小宰相とくふふりてふけん

おろくそくあり

齊
王
之
子

[illegible]

叔
中文の
習

中文の所引く又流るるをせしむるを割く

清々々々々

美
白牡丹とるく中交のよみ

那玄のひら

卷廿一 一 一

廿二日

第
二
の
女
子

神皇正統記

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百。

くそんてん

ひんがしの

くそみえ物もどくしと

卷之六

土佐のめづるべき

女より女二交しを給う

中亭子之海之世

明之中、文も世も、
徳をあらわす世なりと

大將よりまゐりてゆく

必
善
又
此
也

結句とすべからず
 義典

新

るより酒よりふなかと女をへめてまつるをちり

草子の土將れと紙その女よりいけある

美大將の女と云ふを替へるふやと云ふ

必
此物はいの世よりいつまでも
品々をさるゝものなり

あふの流する

義士志士

并

此物
今の
世より
さう
なる
一
た^{トナ}め^君
の
こと
ト
シ
キ
ニ

いづれもちねの身とて

の古物語を水原抄云遠君或又十君云々

此一帖行成卿自筆の本と見ゆ一六并河の中ねとありき
惠心俊都の勤女往生義といふのいふやうにうき世
不傳は并河の中ねりやうれ歎く

いふやうあるやうとやういふやういふやう

せしむるやう

きつりといふやういふやうのやういふやう

并河の太将ののけりあるやうなる

并物語のせ一文のなにいふやういふやうありけり

新抄系は落つたにても秋風もそそりてかみかみ

法抄系を
又凡のなてもありむとせむのやう

たまたまいふやういふやういふやう

いふやういふやういふやういふやういふやう

繪をそへてなほいふやういふやういふやう

あけられいふやういふやういふやういふやう

花あけられいふやういふやう

必

いふやういふやういふやういふやういふやう

時のみいふやういふやういふやういふやう

いふやういふやういふやういふやういふやう

いふやう

まのいふやういふやういふやういふやう

あさきいふやういふやういふやういふやう

いふやういふやういふやういふやう

いふやういふやういふやういふやういふやう

いふやういふやういふやういふやういふやう

いふやういふやういふやういふやう

いふやういふやういふやういふやういふやう

いふやういふやういふやういふやう

秘白きいふやういふやういふやういふやう

いふやういふやういふやういふやう

秘あきいふやういふやういふやういふやう

美蕉の性よりうへてき 秘子地といふる

あつてにあらぬやうに 白乃久

海女よりこれ取んぬるなり

ふりよりとりて 中一

ゆきしと人乳をとりて 海女の別後なり

ふれどもぬきあはれいふくわたりぬ 白文の中一

きやいゝやうの海女 白文の中一

て海女をとりて 海女の海女

めのかい人よりと 海女の海女

私名をとて海女とす 必の海女をとりて

海女より人乳をとりて 海女の海女

海女よりとて 海女の海女

ししと也 井川

京ふちあやここの海女とてなりけぬ

秘海女よりとて 井川

うて海女の海女 白文の中一

海女よりとて 海女の海女

海女よりとて 海女の海女

海女よりとて 海女の海女

海女よりとて 海女の海女

海女よりとて 海女の海女

いよりとて 海女の海女

白文の中一 海女の海女

海女よりとて 海女の海女

海女よりとて 海女の海女

うりてとて 海女の海女

大なるとて 海女の海女

海女よりとて 海女の海女

海女よりとて 海女の海女

海女よりとて 海女の海女

なりてんてちつしんは

必くさふ

奇くさふにやる人もあつて

これまゝせむいぬか式部々の清いもあ

奇くさふの式部々の清いもあ

せむいぬか式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

式部々の清いもあ

秘明乙中官清源殿とてゆへありあらんとて

秘明石中文夏へ 義内裏(還書也)

秋のけしきに葉はけりやと 秘秋のさうりひをたけり

ころあそくふとらへ 秘白へ 義同 舞柳のさく

船やあそく 秘白文のさく

いまえすもつたのさく 義あ及りう白のさく

いさもつりあちあち 秘りぬやとて

義きいふのさくに入らぬ 義せぬさつつけあふとて

きいのさくあつりあふと 白へりあふと

うははのさくうりのさくはな 秘ははまの二はま

ゆとのさくうははのさくさくいあふと

義ははのさくしははへ

いつさくうりて 白へりあふと 義あふとはあふと

いせしあふとあふと 秘ははのさく

うりさくのも 秘あふとのも 義ははのさく

かきしあふとあふと 義ははのさく

あふとあふとあふと 秘あふとあふと

必すははのさくうりあふと

義白へりあふとははのさく

秘ははのさくうりのさくはな

初ふとあふとあふと 秘あふとあふと

中あふとあふとあふと 秘あふとあふと

白へりあふとあふと 秘あふとあふと

あふとあふとあふと 秘あふとあふと

あふとあふとあふと 秘あふとあふと

あふとあふとあふと 秘あふとあふと

あふとあふとあふと 秘あふとあふと

あふとあふとあふと 秘あふとあふと

あふとあふとあふと 秘あふとあふと

あふとあふとあふと 秘あふとあふと

あふとあふとあふと 秘あふとあふと

秘
花自秘我うと半と三人を女めもみりしとて
三人よりぬく人々を
女めの志あるを

てゐるまゝに
あれが心とてあれが身とて

秘
女はこれ方ふまで

女房の中にひとり人あり

[illegible]

秘^糸もハツの夜迄はあつてゐたわさうなう
けを

河海川分多從衆計八月七日候是公在少府卿

そとく 廻り道より 早く くる 手あへの あさめ 房を 心

[illegible]

やう云ふ如く
うらむそま
ゆるやいふ
(三)

松竹梅の三つは
是より見ゆるにあふとそそめ

いづくさひさる(きゆ)のなほのちとせぬてな

し、
とてふてそれをお方のうへに次おれをせぬ程と云ひ

おさしそ中くはるん
秘世方のるはるもこそ水也

大にけしきあるまゝハナ房のりくハナ
花屋人よりちねハナくくくくくくくくく

私物の理はあつてゐる。また理として

多々此の如く云ふに
けり

秘
只に奇くいふやと
おんそのゆゑて
うきよけて物を
しる

今も水に
私を

秋の風は、
しらけわたる

[illegible][illegible]

そなりとさるゝ
おのれふたつあさくわん

月にはるるの中月にあそびを

[illegible]

なまのめをわらうるわらうるに似合ふるの氣に

寄
子
ハ
今
に
却
ル
事
ハ
今
更
ニ
有
リ
ト
云
フ

て又ゆるむと多にとぬる如くとも

私此一段よく別處へききわけていする

金さゆちさ人のくらゆめゆめと八奇とと

[illegible]

とつてあるといふ先づくは

秘
恙乃河之弁うくらふなりといふ所とくらその終り

芝の風流をぬかすはとて毎とくちをぬかし

幸
 甚よいつかぬ人の死をまつぬハあることあり毎

とみそつにちあてはあつひもあつちるにふりく
とちあてち物ハさへ化なしといふゆゑにふりく

ゆゑあつしとて其の年々心あてぬし云 別とていふらんをあら
かきぬハねここへーとやうらちとをていふあつしをあら

秘
舟之海

舟女席之祥

松舟義

分りしちたの正清く
秋のまゝくあるへ

本丁此なるにきりくれ
新女座元の蓮と死す時

としあむさうくせうのやれとおひけ

廿郎花とぬふの聲は海に
アミをあらわすは名とるま

女郎もたふりて
Pとあると蓮のよき
花

あふまはるをいふ女あまのしとあまのし

そを千とくはしそとれあは
世多き事小なり候と

蓮の咲くをみちとえさをもりしとる

蓮の如き人あり世廣に

下
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

秘にてもあつた中々死んでゐるやうな
ものがある。それは、

美是心中得
五之
召
誰
志
如
也

けりていへも名しをわさるまじきなりてのあふれは
 けりていへも名しをわさるまじきなりてのあふれは

糸
 けうハあもりふ言也 数なるをふなりと云ふや
 祓花と云名ハあこあしとあてれんふいふやと云ふはよくよ
 糸糸と云
 糸 女乃らあれハとてあてと云はれふあり

こそはあれやうて

新しうあらうとてふとあるはうあらうとてはとて

いづれのかりけらみゆけらと

祕

秘し事とせし人の慈みとるにあられてなる也

心けよくあつた乳下をゆらゆら

以翁言 老人初

花
年よりむろてきさ

へんかぬとふくさひのふかきとてばうきうき
 私共もなほたふへるうきあひあひのうきあひ
 あひうきとて早下してぬきとらふなり

新報云く花といふはを敷あらはとさひく卑下して爲云
ふれを以て今世に於ける人としてさひく爲云く
——と毎ういひく又あらとありき

解

毎以新て和心とよとを平くうらむをうらむ

此哥 秘毒ニ
あへん 毒ふり
いふ所
さへ

後福して此海にありあけなるは病ふくむるを

と云ふは、いふ人のあひくちあひぬちと也 毎ハ恙

世にありては、あまのうらやまをいひおこしむるものなり

松は、この道のとて、ゆるいところ、あつて、それ、うへへ

これ一板讀んでおらせよその時處の如くであつた

ぬきあふしをきくまをいふは初より

よそ信月——と并ふあふあふあふあふあふあふ

られりるをいふ意の事といふ所も

そむらふにありてふせし
ふせし後ありてふせし

年々
秋之福多し大に此より
山と海あり

秘
意
の
年

舟
第

そはくゝとみづを一夜に秘して煮のかきよめうめ

松花よりぬく蕙のたよりを

アキコトモ

花乃五葉

い

蓮のふとみく

毎刻より一回答

思ふふの理とおくくさあ

とくを花のよそへ

秘
舟
釣
あり
ろ
こ
書
ふ
海

義
毎
う
う
に
の
あ
る
は
た
に

叔
のちのち

秘
是の初平果を多々かた絶

女房より仰るに海へつて魚を

齊

蕙よ其つるれいぬむちくくくく

人忠るをくらあふるもろ下といひく立あふとて

女とちのうらあゝんとまひたりふと知りてさか

白牡丹と蓮の花の香りがあふれる

秘
毎
了
と
女
方

夢のしらふも
 世にうゑるもの
 主と名の入るもの

芝のふゆ

中についでとてたづなは秋のそ

河大瘞四尋心慙苦
就中腸斷是秋天
白樂天

い川之人忠孝熱志あれども妹をば久々の如かり

松河川で舟をこぎぬと秋の松をおまふものゝさちをけり

不可不知

より清く正しくありたい

糸
さ
り
ま
の
め
い
う
ま
い
く
の
め
い
う

まじあもしくていなり
河をくみりくみりくみり

白毫中ぬまのしゆをひき

う乃ちの中將と

花
一、二文の如きもの

秘女一品文の中將云々

卷一

なほあゝくたさる

弁
白文の何よりやそ女房の

者とふいとありけりとはひき

多しふとらそめふとらそふとらそくゆけあてさこも
はるさうよや

義
蕙のは中將を誰かあてゆくさふ

詩卷之七

蕉の是中將と誰か多しゆく

ふけ者うとやうあうとひなうと

こゝろふそんれちあれと

秘
白
ハ
流
シ
マ
ル
ハ
モ
ト
ト
ル

善刻

私女房此句亦在後てまづを祓ふ此句

地ろくろなるるを清めくあに

句の好むふゆの

13

ふりそくしるゝゆゑに

秘女一

もさくし一ふ文の所をふ蓋のしとくしあをさうふれあり

よきまは蓮のそとにゆりふせふの方かぬのそと

新編

竹のうら
 葉のさへ

とふとて
海を
とる

まゐるいさあさうにあらうとさうひよりてあふふふ

い
蕙のそひまを
一ふ乃まのゆ
方ふまのこ
りふそひま

らんふくひつふてふひふをふふ

解之好い

叔
蕉のほめるにふとほふを
おとすをいふ

まゝにふせあゝんを

叔父の女はあまのふりては

論語云難乎有恒 述栗才七

秘
人の心よりさへ死めんと

人の心とまゝ

蕉のふふふにふふふ

のさのの

宇原中丞の

白文の方中居る

おれをふとめさう
かきぬきぬき

養白あしきさ

中一のなるを

いとひちちいづえみちゆたこのまゝとくや

た
い
と
と
お
た
い
て
い
ふ
の
う
き
を

松葉もむつゝそそとくふふあふり

京のやうな中をたふさふと

松原あきむつ
ひい家おと
のりさへ
困るあきむつ
あきむつ

西子
為

なほさういふありうさこのよはうに志願なうりうりぞく
秘中五のおふらをもとめられぬとみれりこ方にさるるる法
さうおれをいふをさるる人のうちふ 秘二五のうさうていり

秘中五のおふら世のうさうあうい

いりておふらとねえとあうい 秘二五の中五のうさ

うさうていりておふらとねえとあうい 秘二五の中五のうさ

秘二五の中五のうさ

いりておふらとねえとあうい 秘二五の中五のうさ

秘二五の中五のうさ

いりておふらとねえとあうい 秘二五の中五のうさ

秘二五の中五のうさ

いりておふらとねえとあうい 秘二五の中五のうさ

秘二五の中五のうさ

すろなるあけさのうさうあうい

秘二五の中五のうさ

秘二五の中五のうさ

いりておふらとねえとあうい 秘二五の中五のうさ

秘二五の中五のうさ

秘二五の中五のうさ

いりておふらとねえとあうい 秘二五の中五のうさ

秘二五の中五のうさ

いりておふらとねえとあうい 秘二五の中五のうさ

秘二五の中五のうさ

いりておふらとねえとあうい 秘二五の中五のうさ

秘二五の中五のうさ

秘二五の中五のうさ

秘二五の中五のうさ

秘二五の中五のうさ

秘二五の中五のうさ

幸おとろふといふ

るのめろろろ

てなぐりてつて

和
廿一
亥と
廿二
亥
あ
く
と
也

王をよめるの對

れも又あつてゐる

終へてゆく

けいふふふふふ

れそあつて

のそく

とく 好まう っ ほうふ じ ち ち

故々將織半時々需小終

花仙篇よ女の望をかく紙やうといふ所なり

人上福もく
ふは家なうと
世を介とも
賑ふん時

いそろりあゝん乃ては只皆好に當るゝかけり

見河此の致下に之ての終り終ふ時いそ

らなりぬんと云ふるにせし文のるべからしむを絶

うねきふて

五十二人部とあるにうら

人々を以て

せふふとくかきとてのちうへにせなりてとくひなふ

おらふ心なる

うけとて遊ばし花をこはせふのこのかしとそふ養は白まは

世一平の兄少くも一海世の女一平侯と名乗るといふいづゝ白き
おんまゝ一平なうり

花
花信室に乳紙のいさういさうと云
文のるはたう一ふふ知るる句
みきりしをいふを
私花可然

おのちのち

奇のゆゑに

あそびにゆく

容ヨウ貌ホウ似ス男ヲ潘ハン

安仁之外男氣

朝此兄崔季圭之小姝

格
他
客

花にけし梅仙客の心紙よりて金より
芝草の明る中を此湯より入

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十

724

夢の如く
乃て此を以て
白紙用とあり

笑
遠安に崔季雅とみ客のそとにありとあり

まゐりあひし

秘中の御うまい

張

[illegible]

いふはなつてあつてふいふなり

いさふまゝに
何の紙をも
之よりまゝに

老人のいふに、
乃、汝は、



人志ぬをよせり

秘、
の如く

私へのゆるぎなき愛のすゝめ

さしつかへなくものゝあはれと云ふにや

と云ふ事と云ふ事より即ちゆるる事と云ふ事

人としてありたい

花
石
の
ま
じ
に
ま
ふ
し
く
と
な
り
た
る

[illegible]

松竹梅

正徳九年

養子

河
子
て
ぬ
と
より
に
み
て
る
を
り
と
い
は
せ
て
也
乙

則古を以てとて之を中へ入る

建武四年己未三月

秘、
い
多
子
自
二
一
七
三
直
北
中
富
之
三
之

いふことあるは、
いふことあるは、

子とていふは、
人から見て
まのまゝに

そはひる人のまうらあそむるを

芝とらきうらふれあふとけあうらあつくと

及のさぬとけり

いふなりけりしにさふぬよ 秘 けりしなり

あふれえりておひあふりさふなり

あふれおひあふりし 蕙 ちと年なりしにさふぬ

ゆりてさこしにさふなりぬきし

ちとさといふのふれしにさふなりぬきし

私花なりぬき ありてさふなりぬきし

ふれぬふれぬとてさふなりぬきし

なりぬきぬき の 條次つさく人なりぬきし

い 蕙 乃ちさふなりぬき 奇 案

いふなりぬき の 條次つさく人なりぬきし

秘 蕙の初しにさふなりぬきし

今ハさふなりぬき 秘 女二ふれあふなりぬきし

いふなりぬき 人 是てさふなりぬきし

いふなりぬき の 條次つさく人なりぬきし

きふにさふなりぬき 秘 女二ふれあふなりぬきし

いふなりぬき の 條次つさく人なりぬきし

いふなりぬき の 條次つさく人なりぬきし

いふなりぬき の 條次つさく人なりぬきし

いふなりぬき の 條次つさく人なりぬきし

いふなりぬき の 條次つさく人なりぬきし

いふなりぬき の 條次つさく人なりぬきし

いふなりぬき の 條次つさく人なりぬきし

いふなりぬき の 條次つさく人なりぬきし

いふなりぬき の 條次つさく人なりぬきし

いふなりぬき の 條次つさく人なりぬきし

いふなりぬき の 條次つさく人なりぬきし

いふなりぬき の 條次つさく人なりぬきし

いふなりぬき の 條次つさく人なりぬきし

いふなりぬき の 條次つさく人なりぬきし

むろふまつ人あゝなゝてはらうはなにしあふなりとい
しづかひ

秘 夫志のいふと志あふはなうりくしはつるよとこれ
人あゝしあゆみまうし文の志ははれはれよといひうら
くしはつる花をのむいしはつる

秘 夫志のいふと志あふはなうりくしはつるよとこれ
人あゝしあゆみまうし文の志ははれはれよといひうら
くしはつる花をのむいしはつる

秘 夫志のいふと志あふはなうりくしはつるよとこれ
人あゝしあゆみまうし文の志ははれはれよといひうら
くしはつる花をのむいしはつる

秘 夫志のいふと志あふはなうりくしはつるよとこれ
人あゝしあゆみまうし文の志ははれはれよといひうら
くしはつる花をのむいしはつる

秘 夫志のいふと志あふはなうりくしはつるよとこれ
人あゝしあゆみまうし文の志ははれはれよといひうら
くしはつる花をのむいしはつる

秘 夫志のいふと志あふはなうりくしはつるよとこれ
人あゝしあゆみまうし文の志ははれはれよといひうら
くしはつる花をのむいしはつる

秘 夫志のいふと志あふはなうりくしはつるよとこれ
人あゝしあゆみまうし文の志ははれはれよといひうら
くしはつる花をのむいしはつる

秘 夫志のいふと志あふはなうりくしはつるよとこれ
人あゝしあゆみまうし文の志ははれはれよといひうら
くしはつる花をのむいしはつる

秘 夫志のいふと志あふはなうりくしはつるよとこれ
人あゝしあゆみまうし文の志ははれはれよといひうら
くしはつる花をのむいしはつる

秘 夫志のいふと志あふはなうりくしはつるよとこれ
人あゝしあゆみまうし文の志ははれはれよといひうら
くしはつる花をのむいしはつる

秘 夫志のいふと志あふはなうりくしはつるよとこれ
人あゝしあゆみまうし文の志ははれはれよといひうら
くしはつる花をのむいしはつる

病^二人^一とてふれおあもつこのきれさの世ふしを
養^二心^一ハ世をれぬと教へてふる川あおれし
秘^二あ^一れしとていふもつあれさるるまゐる世あ
るこそあめいふるれもつあれいふもねあま
今来けつふふ二家より一は陽施と云ふ湯気の種ので
るを云ふもつこのりあるまゐりてふあハもく一は陰
り虫くもつれとれとらふれのとねあれとふあ
是くは奇ハ何ふもそのやうてゆりさあ
秋乃時ハ花虫のゆよあ人あや
陽焰 涅槃經云受者熱時之炎疏云熱炎輪但有其名而無
其實 華嚴經云譬如春月時衆生見炎氣愚者謂為水 又
同經野馬ト多アリ
夏月光とていふてつ解をあらうと氷よりもつふさあ
多^二く^一てふれおあもつこのきれさの世ふしを
もつあれとていふもつあれとていふもつあれとていふも
日^二は^一あつとていふもつあれとていふもつあれとていふも
日^二は^一あつとていふもつあれとていふもつあれとていふも
けあつとていふもつあれとていふもつあれとていふも

もつあつとていふもつあれとていふもつあれとていふも
淮南子曰水臺為地列子云蟻塚主朽様之上因而生鵲陽死
もつあつとていふもつあれとていふもつあれとていふも
いつとていふもつあれとていふもつあれとていふも
もつあつとていふもつあれとていふもつあれとていふも
といふとていふもつあれとていふもつあれとていふも
あつとていふもつあれとていふもつあれとていふも
りあるまゐりてふあハもく一は陰
中^二は^一あつとていふもつあれとていふもつあれとていふも
もつあつとていふもつあれとていふもつあれとていふも
もつあつとていふもつあれとていふもつあれとていふも
もつあつとていふもつあれとていふもつあれとていふも
いつとていふもつあれとていふもつあれとていふも

紙前

